

ベ ス ト ピ ア  
Bestopia

「パリ通信 17号」

ベストピアは小原靖夫の  
個人誌です。

平成  
二十五  
年五  
月  
第  
十七  
号

< 2013年 5月 >

古賀 順子

### 人は 360 度花の綺麗に囲まれるべし

パリは、雨が多く寒い5月になりました。5月8日フランスは第二次世界大戦の終戦記念日、祝日です。9日キリスト昇天祭、続く週末で5連休を楽しむ人で観光地は賑わっています。私は、小原先生とジヴェルニーのモネ財団に出掛けました。

パリから約75kmに位置するジヴェルニー。ルーアン方面の高速13号で1時間足らずの距離です。ノルマンディー地方入り口の小さな村ですが、クロード・モネの庭園を見る人たちが世界中から集まります。この日も午前中パリは雨。午後ミニバスを下車する頃にはその雨が上がり、高速道路から見える黄色い菜の花畑、木々の緑が雨に洗われ光り輝いていました。

モネは、1883年から1926年死去するまで、43年間ジヴェルニーで暮します。庭を作り、花を植え、日本橋を架けた池には「睡蓮」を咲かせ、四季折々、一日を通して刻々と変化する光を描き続けます。そのモネの庭園、作品、生き方に魅了され、独自のモネ理解を展開する日本人がいます。東大農学部で園芸を学び、都市と庭園、人と庭空間の在り方を見直すことを提唱されてきた小原正夫氏です。「モネノート」「人は360度花の綺麗にかこまれるべし」の題が示す通り、モネが描き続けた「花の庭」「睡蓮」の作品群を通して、花（自然）にすっぽりと包まれることで人は命の源に至ると説いています。シダレヤナギが静かな水面に映り、天空と水の境は消え失せ、縦の360度が出来上がります。そしてローズ・アーチが横の360度を構成

します。画家であると同時に偉大な作庭・園芸家であったモネの植栽ディテール。園芸の専門家として、生態学の視点から興味深く読み解いたモネノートです。

確かに、ジヴェルニーの花の綺麗に囲まれていると、命を感じる優しい心が芽生えます。色とりどりの花や樹木、そこに流れる風や光は、自然を敏感に感じることの大切さを教えてくれます。とりわけ小さな草花にも心を通わせる日本人にとって、自然は共に生きる大切な存在です。ジヴェルニーの庭を歩きながら、日本人の自然観、その端的な芸術である俳句のことを考えました。

現代俳人黛まどか氏は、東日本大震災直後から被災地に入り、俳句を通じた活動を続けておられます。そして、毎年音楽を通してパリの地から被災地への思いをチャリティー・コンサートの形で継続されている作曲家上林裕子氏宛に、メッセージが届きました。長くなりますが、全文を紹介させていただきますと思います。

「被災後も自然を尊び、

自然と共に生きる日本人」

2011年3月11日、東北地方を、大きな地震とそれに続く大津波が襲いました。当時私は、文化庁の派遣事業で、パリを拠点に俳句発信の活動をしていました。私は東北に住む友人とメールで連絡をとりながら、成す術もなく、ただただネット上のニュースで情報を得るしかありませんでした。凄まじい津波の映像……やがて、人々が僅かな物資を求めため整然と列を作って並ぶ様子が映し出されました。周囲のフランスの人々は口々に、被災者の辛抱強さ、秩序正しさを讃えてくれました。フランスのみならず、今回の震災で

日本人（東北人）の美德が世界中から賞賛されましたが、その根本には日本人の自然観が深く係っていると思います。地震という免れ難き天災を幾度も経験する中で、日本人は天変地異を受け入れ、畏敬の念を持って自然と共に生きる道を自ずと選んできたのでしよう。

被災者のある牡蠣漁師が「それでも海を恨んでいない」とおっしゃっていたのが印象的でした。津波は彼の家族も養殖場も持ってってしまった。それでも何百年何千年と恵みをもたらし続けてくれた海に感謝し、これからも共に生きていこうとされているのです。

日本人は古来自然を尊び、共に生きてきたと言われますが、自然に自らの運命を委ねて生きてきたのです。委ねるとは信じることであり、共有することです。どんな状況下でも自然を尊ぶ心を忘れないということを、今回の震災を通して再確認しました。

私は四月に帰国すると、すぐに被災地へと向かいました。被災地ではすでに多くの方が俳句を紡ぎはじめていました。中には津波をかぶったその夜から俳句を作りはじめた人もいました。

ある避難所では、何人かの子どもたちとお年寄りが集まってくださって、私が持参した短冊に俳句を書いてくれました。桜や水仙など、花を詠んだ句が多かったのが印象的でした。被災者の皆さんは言います。「自然によってすべてを失ったけれど、自然から再び生きる力をもらっている」。震災の後も自然への信頼が少しも揺らいでいないことがわかります。また、被災者の俳句には震災の凄まじさとともに、四季の移ろいに自らの命のありどころを確認し、自然から再び生きる力をもらっていることが窺えます。阪神淡路大震災の折も、多くの俳句が被災地で詠まれました。まだ食べる物も、衣服も、住む場所も整わない中で、人々は俳句を紡いだのです。文化や芸術は人としての誇りを支えます。だからこそあの混乱の中でも、世界中から賛美されるような秩序が保たれたのではないのでしょうか。

私は被災地で生まれている俳句を収集し、俳句を通して被災地の実態と被災者の心を伝える活動をしています。

俳句は、生きる力への、生きる喜びへの足掛かりとして、いつも私たちの身近に存在していると、信じています。

最後になりましたが、このチャリティー・コンサートを企画し、集って下さったすべての皆さまに遠く日本より心より感謝申し上げます。私たちはこの震災を教訓にして、より良い国を、より良い世界を作ってゆきたいと思います。

「満開の桜に明日を疑はず」

黛まどか